



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

物語創作を通して同性婚を考える： 性的多様性と社会科教育の未来

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊田, 龍明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166744

物語創作を通して同性婚を考える

— 性的多様性と社会科教育の未来 —

Examination of Same-sex Marriage Through Story Writing

— The Future of Sexual Diversity and Social Studies Education —

公民科 楊 田 龍 明

<要旨>

性的多様性を包摂する実践の広がり社会科教育で期待されている。論理力よりも共感力 (empathy) を育成する実践として物語創作を提案したい。当事者の思いや立場に迫りつつ、物語に託して語ることで偏見も含めて自由で安全な言論空間を創出できる。物語を作り込む中でリアリティを醸し出す作業の中で誰かの感情や経験を分かち合う共感力を育成できると考えている。

<キーワード> セクシャルマイノリティ, LGBT, 性的多様性, 同性婚, 社会科教育, 物語創作, 共感力, 公共, シティズンシップ教育,

1. 本研究の目的

「日本において同性婚を認めるべきか。みんなで議論したい。[少子高齢化に影響が出る] や [LGBTQ カップルは生産性がない] という意見もあるが、私はそうは思わない。私は同性婚が認められて欲しい。なぜなら私は…だから」。これは4月の授業開きで生徒から出たリクエストである。

性的多様性を育成する授業実践が求められている。2016年に文部科学省は「性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」を通知した。金沢大学は同性婚を描いた漫画『弟の夫』を入試問題(2019年)で取り上げた。ゲイであることに悩む中学生の気持ちに寄り添って、個人的な事柄が社会問題につながることを考えさせる良問であった。また「[論証の構造]を活用した学習の授業構成-同性婚を事例として-」(小貫2019)など性的マイノリティを題材にした授業研究が報告されている。社会科教育で性的多様性を包摂する授業実践の広がりが期待される。

生徒のリクエストを踏まえ、2019年11月に本校の公開研究大会で「物語創作を通して同性婚を考える」実践を行った¹⁾。本研究では次の点を明らかにしたい。第一に社会科教育の立場から、性的多様性の育成に必要な視点は何か。第二に、物語創作という手法を用いて社会問題を考えることの教育的意義とは何か。その上で、共感力を育成する手段として物語創作を提案したい。

2. 性的多様性を包摂する学校教育と社会科教育

じゃれあって遊んでいる男子生徒に向かって、教師が「お前ら、オカマか」と叱咤する。

自分の周りには性的マイノリティは「いない」ものとして「無自覚で差別的」言動が教育現場でも公然と行われてきた。近年、自分の性的指向・性自認に即した生き方を追求する人々が着実に増え、こうした言動が差別的・抑圧的であることが意識されるようになってきた。文部科学省の通知(2016年)では「教職員としては、悩みや不安を抱える児童生徒の良き理解者になるように努めることは当然であり、このような悩みや不安を受け止めることの必要性は、性同一性障害に係る児童生徒だけでなく性的マイノリティとされる児童生徒全般に共通するものである」と記された。この通知の意義は大きい。中学校・高校という時期は、当事者にとって同性愛に関する誤解のない環境が最も必要とされる時期である。前川は、「学校での同性愛差別と教師の役割」の中で(日高庸晴の調査を示しながら)、【まさに中学・高校の時期にこそ、当事者たちが自らの同性愛を自覚し、それに関する様々な悩みや葛藤を抱く時期なのです】と述べている²⁾。

「ゲイであることを なんとなく自覚した」	平均年齢 13.1 歳
「異性愛者では ないかもしれないと考えた」	平均年齢 15.4 歳
「ゲイであることを はっきりと自覚した」	平均年齢 17 歳

<表> 思春期におけるライフイベント平均年齢(有効回答 1025 人)
引用: 「REACH Online2005」/日高庸晴の調査

アインシュタインの言葉に「常識とは18歳までに積み上げられた先入観の堆積物にすぎない」とある。男と女が愛し合い、結婚し子育てするのが【アタリマエの常識】だとされる価値観に生きづらさを感じる人がある。ライフモデルが少なく、親や家族とも共有するのに勇気が必要な性的マイノリティの生徒は、環境や自分の将来に対する不安を感じている。こうした当事者の生徒が自己肯定感を持ち、安心して自分の力を発揮できる学校環境を整える必要がある。

新しい学習指導要領ではLGBTに関する記述はみられないが、2021年度から中学校で使用される教科書では保健体育など6教科計17点でLGBTなど性的マイノリティに関する内容が取り上げられている。国語の教科書には、当事者であることを公表した日本文学研究者ロバート・キャンベルさんの文章が掲載された。公民の共生社会を考えるページでは、同性カップルのホテルの宿泊拒否を違法とする国の見解を示し「多様な性の意識を持つ人々が、社会の中で自分らしく生きるための取り組みも必要」とした。美術では同性カップルが描かれた生徒製作のポスターを紹介。性別に関係なく制服のストラップをはけるようにした自治体の動きは公民などで取り上げられた³⁾。また高校公民科でも、清水書院は「政治・経済」の「法の下での平等」のページで、差別や偏見を解消すべき課題の一つとして、障害者やハンセン病の元患者とともに「性的少数者(LGBT)」を挙げ、用語説明を載せた。2015年に米国の連邦最高裁が「同性婚を禁止する州法は違憲」とするなど、同性婚を合法化した国が約20カ国に広がったことを紹介。同性カップルに男女の婚姻と同等の関係を認める東京都渋谷区の「パートナーシップ」証明についても記した。また清水書院は「倫理」でも、「家族のかたちの変化」の項目で、夫婦とその子どもからなる「核家族」のほか、「多様な家族」として「独身のまま過ごす人や、子どもをもたない夫婦、結婚せずに子どもとくらす親子、また、同性どうしでくらす人など」と記載されている⁴⁾。こうした教科書の変化は実践現場に影響を与えていだろうか。

社会科教育では次の2つの視点から性的多様性を扱うケースがあるだろう。1つは差別や偏見に焦点を当てて人権教育として、2つ目は同性婚など法制度(政治権力)に焦点を当てて考察させる実践ではないだろうか。性的マイノリティに対する差別や偏見を人権教育の視点で伝える前者の実践は重要だ。差別をなくすためには「良心ではなく知識が必要」と言われる⁵⁾。「よい人」になることではなく、知識を持つことが重要である。一方で差

別をなくし他者を尊重する態度を育てることは教育全体の目標であり、道徳、保健体育科、家庭科、セクシャリティ教育、総合学習、ひいては教員研修など様々な教科・学校種で行われている。性的マイノリティの当事者による出張授業も積極的に行われている。性の多様性を教科横断的な視点で捉えさせていくことも大切であるが、それぞれの教科の観点を活かした実践も深めていきたい。社会科だからこそ可能なアプローチも大切にしたい。それは、同性婚など法制度(政治権力)に焦点を当てて考察させる実践ではないだろうか。

私事が公共的なことになっていく。これを明らかにすることが、社会科からの重要なアプローチだと考える。小貫は「同性婚は、性的指向・性自認という非常にプライベートな事柄と、婚姻という法制度が密接に関連する法的な社会問題といえる」と述べている⁶⁾。婚姻という制度が個人の問題(セクシュアリティ)に介入する場面があり、それがパブリックな問題につながることを考えさせる。「個人的なことは政治的(personal is political)である」⁷⁾。これは1960年代以降のラディカル・フェミニズムと呼ばれる潮流において、スローガ的に提起された表現である。何が公的で、何が私的であるかの区別は決して自然なものではなく、政治的につくられるということの意味する。例えば私的であるはずの家族のあり方は、国家・政治によって公的に形成される家族や婚姻にかかわる法によって規定されている。「誰と誰が結婚できるのか」「いかなる場合に結婚は解消できるのか」といった問題はすべて国家によって形成される法によって決められており、人々の家族生活のあり方はそれに大きく規定されている。これが「個人的なことは政治的(personal is political)である」の意味である。婚姻制度が私たちの私的な領域にどんな関わりを持ち、どんな法制度が望ましいのかを考えさせることで、私事が公共的なことになっていく構造を理解させたい。

3. なぜ「物語創作」という手法に行き着いたのか。

「物語創作を通して同性婚を考える」実践として、生徒たちに次のような課題を提示した。

トモヤ、リョウ、サヤカ、マイは大学の演劇部に所属する仲良し4人組。卒業を間近に控え、それぞれ自分の将来について思いを巡らしている。トモヤは控えめな性格のサヤカに好意を抱いているが、まだはっきりと伝えたことはない。ときどき、サヤカと一緒に暮らしている自分を想像することがある。

マイは自由奔放な性格。リョウは舞台に出ているとき以外は無口な性格だが、トモヤには親しみを感じている。

トモヤは早くに父親を亡くし、母親と同居している。父親には弟のトシアキがいた。トシアキは50歳で独身。トモヤはあるとき叔父のトシアキに食事に誘われ、そこで、トシアキには同性のパートナーがいること、20年一緒に暮らしていること、住んでいるマンションはトシアキ名義であること、を聞かされる。トシアキはトモヤに「自分になにかあったときのために、一度パートナーのアキラに会ってほしい」と告げる。

ところが、3人が会う予定だった日の3日前、トシアキのパートナーアキラから連絡があり、トシアキが急病で倒れ、入院したことが告げられる……

この物語の続きを考え、物語を完成させましょう。

生徒たちにルーブリックを示し、婚姻関係にないために起こる法的課題を物語で提起してほしいと伝えた。

物語創作という手法を用いた理由を述べたい。「自分はこう考える」と表明せずに、物語に託して語ることで偏見も含めて自由で安全な言論空間を創出できると考えたからである。例えば、同性婚の賛否を問う実践は適切だろうか。同性婚の合法化を調べた電通の調査（「LGBT調査2018」電通ダイバシテイ・ラボ）では、8割が肯定的な回答をした。特に賛成の割合は20代で多く、87.3%という結果になっており、そもそも議論が成立しない可能性もある。

またディベートを行わせた場合、二項対立（異性愛中心か否か）を煽ってしまう懸念がある。例えば、「婚姻とはそもそも男女による生殖を伴うものである。婚姻の本質から同性婚は認められない」との意見に対して「年齢や身体上の都合で子供を作らないことが明らかな異性カップルの婚姻も有効である」と反駁する。このような議論もあるだろうが、議論の中で「男どうし、女どうしで愛し合うのは気持ち悪いから、私は同性婚に反対だ」との意見が出る可能性がある。この場合、同性愛の存在を認めるか否かの議論に陥ってしまう懸念がある。こうした発言に性的マイノリティの当事者の生徒は押し黙ってしまうかもしれない。場合によっては、自身が性的マイノリティであることを隠すために自ら差別的な発言をする場合もあるだろう。まるでLGBTQの学生が教室にいないかのように議論が展開され⁸⁾、当事者に自己否定を強いることはあってはならない。

同性婚を認めるべきか否かについて、政治哲学者サンデルが目的論に立ち返って婚姻制度を考えていくような議論を行っている。あらゆるケースを例外なく思考する力を養うことや、批判的な態度や問いを立てる力を育てる側面はあるだろう。しかし「同性婚が認められる（愛する者同士の婚姻が認められる）のであれば、近親婚や一夫多妻制も認めて良いのではないか？」とどんどん問題提起していく。この論理性に迫った議論では当事者の心情を理解することはできない。

たとえば「論証の構造」の活用に着目した小貫実践にも当事者への配慮を感じられる。実践の中で次の質問が行われている。【「同性カップルは子供を産めないから婚姻を認めるべきではない」という意見に対して反論せよ。その際、臨終婚と獄中婚という言葉を使うこと】。この問いの趣旨を自己決定と法制度に関わる法的な知識を問うものであると、述べている⁹⁾。ここに配慮が感じられるのだ。ここで【「誰もが平等に扱われる権利を持っているのだから同性婚も許可されるべきだ」という意見に反論せよ。近親婚という言葉を使うこと】。とは問うていない。いや、これを問うことは教育上できないのではないだろうか。当事者の存在否定につながりかねない言説やロジックはヘイトに等しいからである。

当事者の思いや立場に迫らずに、市民的資質の育成はできない。同性婚が内包する性的指向・性自認はLGBTの当事者にとって切実な社会問題である。法によって社会に承認されるかどうか分かれる人にとって非常に切実な問題である。だからこそ当事者の想いを汲み取り、共感する力（empathy）を育成することが大切だと考えた。これはシティズンシップ教育の肝要ではないだろうか。

授業の中で次のような男性同性愛者の言葉を紹介した。「男と女が愛し合い、結婚し子育てするのが当たり前前の社会で育ってきました。一時期はなんとか女性を好きになろうと努力しましたが、無理でした。好きになるという感情は、理屈ではなくて、心の底から気持ちとして出てくるものだと思います。それを【努力】で、別の形を作ることはできませんでした。周囲には男性同士で同居し、過ごしている人たちがいます。確かに子供を作ることにはできませんが、その男同士のふたりが「家族として幸せに暮らしたい」という願いを持つことは不自然なことでしょうか？ 私たち性的少数者には幸せになる権利はないということなのでしょう？ 「認められない」存在から、法的にも社会的にも「認められる」存在へ。（神奈川県・40代男性）¹⁰⁾

「自分ごと」に迫る危険は見えているだろうか。社会科学教育では社会的事象を考えさせる際に、「自分ごと」として捉えさせることが目指される。その社会的事象(被害者の家族や犯罪被害者の遺族など)との関係性を身近に感じさせ、リアルに迫る実践を私自身も行ってきた¹¹⁾。しかし性的マイノリティの中には、未だ家族にも言えず悩んでいる人がいる。性的多様性を理解する授業において、過度に「自分ごと」に迫り、一人一人のセクシュアリティの表明に迫るような問いは危険である。映画『カラコエの花』で描かれたように「クラスにLGBTQがいるんじゃないのか?」と当事者探しが行われる危険もある。実践には「当事者を守るための安全策」が求められる。

こうした課題を解決する方法として、行き着いたのが同性カップルをめぐる物語創作である。「自分は、こう考える」と意見表明させるのではなく、ストーリーや登場人物に託して語ることで、生徒それぞれの多様な価値観を検討し、考察させることができると考えた。

4. 【教室の公共】を作る。

性的マイノリティに対する生徒の意識

以下、実際に行った授業実践を説明したい。初めに生徒たちの性的マイノリティに対する意識を明らかにし共有したいと考えた。事前課題(夏休みの課題)として漫画『弟の夫』(田亀源五郎著/双葉社)を扱った金沢大学入試問題を示し、ゲイであることに悩む中学生に周囲はどのように対応すべきなのか?との設問についての意見を書かせた。

生徒たちの意見を紹介したい。性的マイノリティの友達があり、友人との関係からリアルに考えた生徒たちがいた。「何も特別な対応を取らないことが大切だと思う。私はレズビアンの友達がいる。彼女と話をしている違和感はなく感じない。レズビアンであると告白された時は多少驚いたが、それ以上に彼女はとても良い友達だから関係が変わることはなかった」。「私には小中と一緒だった性的マイノリティの友達がいる。サバサバした男子のような女の子で、あまり気にすることなく仲良くしていた」「夏休みにある友達から、[私は自分のことを女の子だとは思っていない。名前にちゃんをつけてよんで欲しい]と話をされた」と、多様性の尊重は“アタリマエ”だという意見が見られた。

その一方で、「全員が受け止めることははっきり言って無理だと思う。友達関係が壊れる可能性はいくらでもあると思う。周りの人がどう対応するかではなく、本人が打ち明けて周りからの視線が変わっても生きていける勇気があるならいいが、ないならば打ち明けるべきではないと思った」「隠すことが辛いとしても、必ずしも誰もが受け止めておくことができるとは限らない。学校以外で何かのコミュニティーに属するなどして、学校では性的マイノリティであることは隠した方が现阶段では本人のためになるのではないかと思った」と、男と女が愛し合うという固定観念や偏見がある現実の厳しさを指摘した意見もあった。「彼らはきっと特別扱いされることを望んでいないし、からかわれるのも胸を痛めるのですから、普通に接するのが一番だと思います。こうやって授業で取り上げて皆で議論すること自体、結局は異性愛



教科通信「ガクツキ」に載せた生徒作品

者のエゴであるようにも感じます」と性的マイノリティを語ることの難しさを痛烈に訴えた意見もあった。「私が実際に性的マイノリティの存在を知ったのは渋谷区などの同性パートナーシップ条例のニュースを聞いてからです。それまでは人は異性を好きになるものだとばかり思っていました。幼い頃から偏見や先入観を減らしていくことが大切だと思いました」と学校教育による意識改革を求める意見も多くあった。

このような生徒の意見を掲載した教科通信「ガクツキ」を作成し、生徒それぞれの考えや意識の違いを読ませた。級友の様々な意見が掲載された教科新聞で【教室の公

共】、学級の語り場を作り出し、問題意識を共有させた。なお教科新聞には、このテーマに関するイラストやポエム、なぞかけなどの生徒の作品も掲載し、文章や論理だけでは伝えきれない事柄を感じさせた。この新聞を読んだ上でNHKドラマ『弟の夫』で独りで悩みを抱えてきた中学生のカズヤが、ゲイのマイクと出会ったシーンを見せた。「ゲイであることを隠し続けたほうが本人のためなのか?」と問いかけた。本実践は次に示す単元計画で展開した。

単元計画

	主な学習内容	狙いや教師の手立てなど
1 時 間 目	①教科通信『ガクツキ』第7号 ゲイであることに悩む中学生が自己肯定感を持つ場面を広げるには? ②同性愛に関するクイズ学習 ・異性を好きになる人々は何というか? ・同性愛を違法としている国はどこか? ③同性婚に関するクイズ学習 ・世界で初めて同性婚を認めた国はどこか? ④婚姻によって認められる権利とは何か?	①NHK『弟の夫』予告視聴「黙っておいたほうが本人のためなのか?」を話し合う。 ②同性愛を違法とする国がある。チューリング法などで社会の意識変化を認識させたい。 ③世界に広がる同性婚の現状知り、日本で同性婚を求める人の言葉を読ませる。 ④婚姻による権利義務を具体的に理解させたい。 財産権や相続権、配偶者控除、遺族年金や社会保障
2 時 間 目	同性カップルに関する物語創作活動 急病で倒れた叔父トシアキはその後どうなったのか? 20年付き合ったパートナーのアキラは、医療現場・相続でどんな問題に直面するのか?	事前に物語創作の設定を配布し考えてくるように伝えた。婚姻関係にないことで起こる法的問題を描くように促した。甥のトモヤ、義姉や医者などの登場人物の立場、心情を考えさせた。生徒同士で創作の過程でアイデアの共有が見られた。
3 時 間 目	同性カップルに関する物語を共有し、「法的問題」を検討してみよう。 導入Q. 同性婚に関する政府解釈はどれ? 「我が国の家族のあり方の根幹」とは何だろう 物語①「相続問題は円満解決。母親は…!」 物語②「彼は家族ですと言い切った母親」 物語③「母の拒絶。アキラを家族と感じたトモヤ」 物語④「相続。母親を説得できるかな!」	創作物語で描かれた場面を検討。婚姻関係の有無による法的権利を検討し、家族とは何か?婚姻とは何かを考えさせた。 Q.手術に同意する権利は誰にあるのか。Q.法律上の家族が理解を示さなかった場合はどうなるのだろうか。Q.パートナーに遺産を残したい場合は何が必要なのか。Q.婚姻関係によって税制はどのように異なるのか?

5. 同性カップルをめぐる物語創作の実際

前に予告し50分の創作活動時間を設け、220人全員に提出させた。創作にあたり、生徒たちに示したルーブリックは次のようなものである。

5-1. 物語創作のルーブリック

いよいよ物語創作である。単元計画にあるように、事

評価基準（ルーブリック）

	4	3	2	1
A 法的権利など問題の提起	提起された法的問題をどう解決すべきか深く考えさせられる。また、解決の道筋が感じられる。	婚姻関係にないために起こる法的問題を物語で提起している。解決のあり方を考えさせられる。	婚姻関係にないために起こる法的問題を物語で提起している。	同性パートナーに関わる物語を創作はしている。
B 登場人物の立場や気持ちの描写と、人物同士の対話	それぞれの登場人物の立場や気持ちが一語一語に描かれ、その対話は読み応えがある。複数の人物がうまく交錯している。	登場人物の立場や気持ちが一語一語に描かれ、その対話は読み応えがある。	登場人物の立場や気持ちを読み取り、対話が描かれている。	登場人物の立場や気持ちの描写がわかりにくい。
C 表現力の高さ/展開や台詞の面白さ	表現力が高く人物描写や問題は読み応えがある。物語として面白く、その展開に引き込まれる。	表現力が高く人物描写や問題がわかりやすい。展開や台詞に物語として面白さがある。	表現に工夫が見られる。もしくは展開や台詞に面白さがある。	表現や展開に、まだまだ工夫の余地がある。

画力の高い生徒にイラスト制作を依頼し、そのイラストも示すことで生徒の創作意欲を高めようとした。

5-2. 医療行為をめぐる、

婚姻関係にないために起こる法的問題

まずは『彼は家族ですと、キツパリ言い切った母親』を描いた作品を紹介したい。

…タクシーの窓から外を眺めながら、トモヤはアキラの言葉を思い出していた。「僕は家族じゃないから。サインを認めてもらえない」家族ってどういうことなんだろう。受話器を通して聞こえた、切迫した声。アキラがトモヤたちと同じくらい、いやもしかしたらそれ以上にトシアキのことを大切に思っているのは明白だった。「家族じゃない」トモヤは確かめるようにつぶやき、まだ会ったこともない人の心情を想像した。

病院に着くとすぐに病室へと案内された。ふと、病室の前に立ち尽くす叔父と同じくらいの年齢の男性に目が止まった。疲れ切ったその表情にトモヤは心当たりがあった。「もしかしてアキラさんですか？」男性は少し驚いたような顔をして、こちらを見た。「ああよかった。これでトシアキは手術を受けられる」男性はそう言うと、安心したかのようにぎこちなく微笑んだ。

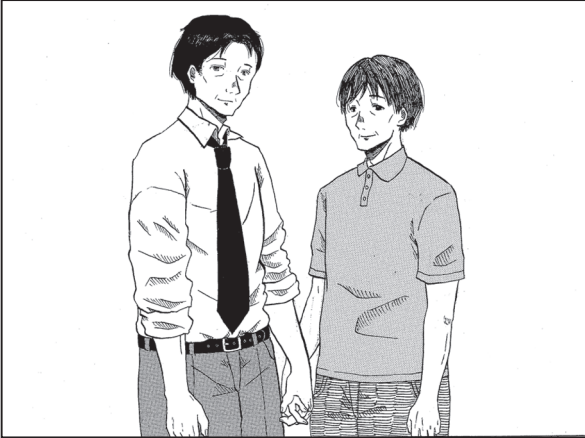
「さあ、中に入りましょう。アキラさんも一緒に！」母が呼びかけた。

「しかしプライバシーの問題もあるので、ご家族以外の方が中に入られるのは…」

「何をおっしゃっているんですか！彼はトシアキの家族です」医師の言葉を遮り、母が力強く放った言葉にモヤモヤが晴れた気がした。「今回だけです」渋々、集中治療室へ通された。

…トシアキが手術を受けている間、僕たちはずっと身を寄せ合って座っていた。時間がゆっくり進んでいるようだった。手術中のランプが消え、主治医が出てきた。マスクを外して、彼はゆっくりと首を横に振った。…

「なあ、トモヤくん。今度ゆっくり夕飯でも行かないか。お前に紹介したい人がいるんだ」そう切り出したトシアキが、あの日話をしてくれたのは彼の同性の恋人のことだった。暑くないのに額に浮かぶ汗、なかなか合わない視線、緊張しているのは明らかだった。何も悪いことはしたわけじゃないのに、「いいね。叔父さんの大切な人に会ってみたい」そう言った時の安心した表情、彼がどれだけ勇気を振り絞っていたのか。この時やっとわかった。同性と



聞いて、少しドキッとしたが、急に饒舌になって恋人について話し出す叔父の姿に、人を思う気持ちに性別は関係ないのではないかと思った。

そしてそれは確信となった。受話器越しの切迫した声。手術を受けられるとわかった時の安心した様子。アキラはこの場にいる誰よりもトシアキのことを想っていた。彼はトシアキの「家族」だった。…「もう少し早ければ…」担当医の言葉にトモヤは耳を疑った。「アキラさんのサインを認めなかったのはあなただろう!!」口を開いたら、もっと酷いことを言ってしまうようで、トモヤは口をつぐんだ。アキラさんは家族じゃなかったから、サインが認められなかった。「すべて国民は法の下に平等、この国民に叔父やアキラさんは含まれないのか？」トモヤの胸の内にはこみ上げた悲しみ、そして怒りはただ嗚咽となって溢れるのみだった。

叔父のトシアキが甥にカミングアウトする場面の緊張感は、息づかいまで伝わってきた。この物語と対比的に示したのが、『アキラを家族の一員と感じたトモヤは何と言った?』である。

病院に駆けつけたトモヤは病室の椅子に座る男性に声をかける。彼こそがアキラ、叔父のパートナーであった。アキラが言うことには同性のパートナーである自分は医師からの説明を受けることはできないとのこと。「だから、トシアキと血のつながりのある君なら…」とアキラが言った。

ちょうど、その時トモヤは左腕をぐっと掴まれた。驚いて振り向くと、そこにはぎゅっと口をつぐんだトモヤの母親が。会釈するアキラには目もくれず、トモヤを物陰に連れて行く母親。「あの人たちと関わって欲しくないの」彼女は厳しい顔で話をした。自分を含め義父と義母（トシアキの両親）は、トシアキとアキラ

の関係を認めたわけではないこと。父親（トシアキの兄）だけは理解を示していたが、両親の無理解に苦しんだトシアキは実家とはほとんど絶縁状態だったこと。

母親の感情を押し殺したような顔と先ほどのアキラの憔悴しきった様子の中で揺れるトモヤ。

間もなくトモヤと母親だけが医師に呼ばれ、叔父のトシアキの病状説明を受けた。「患者さんは意識不明です。緊急手術が必要であり、ご家族の同意が必要です」。トシアキの両親も兄も亡くなっている今、血縁関係にあるのはトモヤだけだった。

翌日の手術に備えて母親だけが病院に留まり、トモヤは沈んだ顔のアキラを慰めながら、叔父とアキラの20年間の思い出を聞いた。出会った頃のこと、二人が好きだった音楽のこと、一緒に見た映画のこと、最近2人で走るようになったこと…。次の日の手術までアキラの話聞いたトモヤは、アキラのことをすっかり【家族の一員】として受け入れていた。

ひとまず手術はつつがなく終了した。トシアキの意識は戻らないが、とりあえず経過を見守ることにしようとして医師に告げられた。トモヤははっきりと依頼する。「アキラさんはいつ来ても叔父と面会できるようにしてほしい。病状説明も一緒に聞けるようにしてほしい。僕は叔父にほとんど会ったことがありません。でも、アキラさんは20年もずっと同居してきたのです」これを聞いた医師は了承する。ただし、トモヤはその旨を一筆認めなくてはならなかった…。



授業では、この2つの物語を、生徒たちと読み合わせた上で、医療行為における法的権利を検討した。Q. 法律上の家族でしか緊急手術に同意することはできないのか？ A. 成人の場合、誰が医療行為の同意をできるかについて、特に法律上の規定はない。身寄りのない人や家族に先立たれた人などもおり、他人が同意することは可能である。しかし、法律上の家族が出てきて「同性パートナーを家族扱いするな」と迫った場合、病院は板挟みになり、親族の

言い分が優先されがちな慣行が存在する。「法律上の家族」が同性パートナーであるアキラの存在を認めていない場合には、死に際にも会えない可能性があることを示した。先の物語に描かれた「母やトシアキの両親は、トシアキとアキラの関係を認めたわけではない」というケースでは、20年一緒に生活した「他人」の死に際に会えない可能性がある。あなたならどうするだろうか?と問いかけた。

「仕方がない。諦めるしかない」とある生徒は答えた。授業の冒頭では、「もしもあなたが急病で亡くなってしまふとしたら、家族以外で誰に最期に会いたいですか?」を問うていた。幼稚園からの幼なじみや、同じ部活の仲間、辛かった中学時代を支えてくれた恩師、生まれた時からずっと一緒にいる犬をあげた生徒もいた。愛する人の死に際に会えないかもしれない切実さに「どんな手段を使っても泣き叫んで医者を読得する」との答えを想定していた。「仕方がない。諦めるしかない」という答えは意外だった。本来、正解などないはずの問いにもかかわらず、なにかの方向に導こうとしていた自分を反省する。

ここで厚生労働省ガイドライン¹²⁾を示した。「本人の意思が決定できない場合には家族等による本人の意思の推定を尊重」とある。ここでの「家族等」とは親族関係のみを意味せず、【本人が信頼を寄せ本人を支える存在】と記されている。これを踏まえて、「何を用意しておけば、「患者本人が信頼を寄せ、患者を支えているのは自分だ」と病院に主張できるだろうか?と問うた。遺書や動画メッセージに加えて、「2人のインスタグラム」を見せればよいという意見も出た。私からは、自治体が発行する同性パートナーシップ証明書も手段の一つにはなり得ると伝えた。大阪市のパートナーシップ宣誓書受領書にはこう記されている。「この受領書は大阪市としてお二人が互いに人生のパートナーとして日常生活において協力し合うことを宣誓されたことを証することにより、お2人がいきいきと輝き、活躍されることを期待されるものです。この受領書の提示を受けられた方は、上記の趣旨を十分にご理解くださいますようお願いいたします。」これを示すことで親族優先の慣行にこだわる病院を説得できるかもしれない。しかし、「法律上は他人にすぎない」ことで、同性カップルは色んな困難に直面することを確認した。

5-3. 遺産相続をめぐる、

婚姻関係にないために起こる法的問題

続いて『君なら、母親をどのように説得しますか』と遺産相続を描いた作品を紹介した。

トモヤは急いで病院へ向かったが少し遅かった。トシアキはすでに息を引き取っていた。病室には泣き崩れている男の姿があった。トモヤはその人がアキラであるとすぐに気づいた。

数日後、トシアキの葬式が行われた。するとアキラはトモヤに話しかけてきた。「君、トモヤくんだよね?」「はい。そうです」「トシアキからトモヤくんの話は聞いていたよ」「そうなんですか。この前、叔父さんからアキラさんの話を聞いたばかりでした。でも正直、周りにそういう人がいなかったのが驚きました」「そうだよ。でも、僕は本当にトシアキのことが…」

「トモヤ!! あまりその人に近づかないの!!」突然、トモヤの母親がでてきた。母親は夫を早くに亡くし女手一つでトモヤを育てた。しかも夫は病気で死んだのではなく、ギャンブルにはまり、借金に追われ耐え切れなくて死んだのであった。そして母はいまだにその借金を返し続ける日々を送っていた。

「正直、私はトシアキさんが死んでもそんなに悲しくありません。あの人の弟だし、いい人なわけがない。しかもゲイだったなんて、こんな人が身内にいたなんて気持ち悪い」、トモヤの母はLGBTに対して否定的であった。

「アキラさん。あなたには悪いですけど、遺産は全てトモヤがもらいます」「えっ、そんなこと一回も言っていないじゃん」「トモヤ、うちがどれだけ大変なのか知っているでしょ。貰えるものはもらっておかないと」「そうだけど…。そうしたら、アキラさんはどうなるの?」アキラは無言で下を向いていた。「別に血も繋がってない他人なんだから、遺産を分ける必要もないでしょう。ほら、もう行くよ!!」

トモヤは名残惜しそうにアキラ一人を置いて立ち去った。その夜、トモヤは眠れずにいた。彼はお母さんの気持ちもアキラの気持ちも理解できた。だから困っていた。彼自身の気持ちとしては「血縁関係しかない自分よりも、20年もパートナーだったアキラさんに遺産を譲ったほうが叔父さんも喜ぶのではないか」。しかしそうするためには、母を説得する必要がある…

授業では、この物語をもとに、Q. 今も苦勞する母親をどんな言葉ならば説得できるだろうか?と問うた。実際に相続した方がトモヤにとっても利益が大きいだけに相続放棄が難しいシリアスな現実を気づかせた。また、公

正証書として遺言がなかったことで相続をめぐる訴訟になっている裁判事例を紹介した。婚姻関係にない人に財産を残す方法として、養子縁組で親子関係になる方法も示しながら、配偶者との税制上の違い、遺族年金や生命保険などの点でも経済的不利益を被ることを説明した。

婚姻関係によって認められる法的権利がどれだけ大きなものであるのかを物語から学んだ。婚姻という制度が個人の問題（セクシュアリティ）に介入する場面があり、医療現場や遺産相続などパブリックな問題につながることを学んだ。私事が公共的なことになっていく。これは社会科教育の立場からの重要なアプローチだと考える。国語科教育でも物語の創作は行われるだろうが、法的権利の考察に絞る点で社会科教育の利点を活かせると考えている。

6. 物語創作の教育的意義 共感する力の育成へ

6-1 差別や偏見を描いた場面についての考察

授業を受けた生徒たちの感想を紹介したい。「テレビで見たことはあったが、当事者の立場に立って考えたことはなかった。当事者やその家族の気持ちを考える良い機会となった」「同性愛者に対して負のイメージを持っていて、今でもその印象は強いが、随分と理解が深まったと感じる」と書かれていた。物語創作はフィクションであるが、当事者の思いに加えて家族や周囲の反応など多角的に考えさせることができる。物語を作り込む中でリアリティを醸し出す。様々な人の発言を思い返ししながら展開を考えることで自身や他者の偏見と出会う。自分はこのように世界を理解していたのか、自分はこんなことを気にしていたのか、ということに気づく。当事者の思いを描くことで差別の構造を見つけ出す。このように自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することで、誰かの感情や経験を分かち合う共感力を育成できると考える。

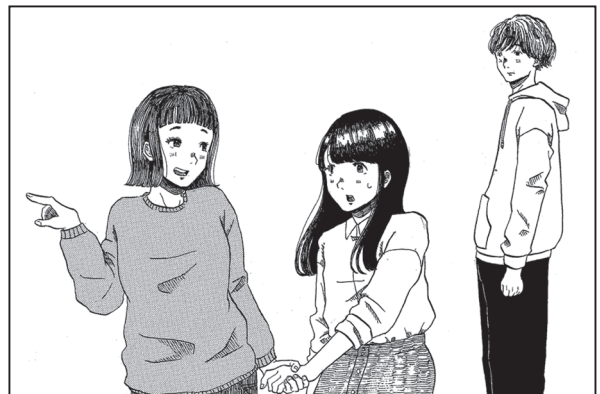
ここでは差別や偏見を描いた場面について考察したい。先に紹介した物語でも「しかもゲイだったなんて、こんな人が身内にいたなんて気持ち悪い」など同性愛を否定する母親が描かれていた。他にも、ある生徒は「トシアキの父母、つまりトモヤの祖父母はヒステリックに同性愛を嫌悪し、機銃掃射のようにパートナーの存在を罵倒した。アキラの見舞いを決して認めなかった」と物語で描いていた。

偏見を持った母親、身内の姿を物語で描くのはなぜなのだろうか。同性愛者への受け止め方の調査¹³⁾では、職場の同僚、もしくは自分の子供が同性愛者だった場合の受け止め方を、「嫌だ」から「嫌ではない」の4段階で聞いたところ、若者はそれほど近い関係にない相手で

あれば、否定的回答は27%と高齢層に比べて寛容である。しかし自分の子供を想定した場合には否定的回答は56%と寛容ではない態度を取る人が増えている。生徒たちの物語は、こうした関係性の近さによって寛容性が異なることを反映したものだといえよう。

物語に託して語ることで偏見も含めて自由で安全な言論空間を創出できると述べた。先に同性婚の是非を問うような実践では「気持ち悪いから私は同性婚に反対だ」などの嫌悪する発言の危険性を指摘した。一方で現実社会には性的マイノリティに対する偏見や先入観、差別は存在する。偏見も含めてありのままの現実を踏まえて考えるべきである。物語創作のメリットは同性愛嫌悪の発言に止まらず、周囲はどんな反応をするのか、発言の行方まで考えさせる点である。例えばこんな物語を描いた生徒がいた。

息も詰まるような夏の暑い日、叔父は静かに逝った。叔父は有名な弁護士事務所に勤めており、その莫大な遺産相続が問題となった。法的に他人のアキラさんには相続権はない。母は権利を主張した。「私たちに関わらないでください。男同士だなんて気持ちが悪い」と母は冷たく言い放った。母にしてみれば、いきなり知らない男が出てきたことに困惑している面もあるのだろうが、この発言に僕は嫌悪感を抱いた。しかし7歳の時に父を亡くして以来、女手一つで育ててくれた母に、この気持ちをぶつけられるわけもなく、僕は悩んでいた。母との関係との狭間で葛藤し、僕は気を病んでしまっていた。



そんな時、陽気なマイの呼びかけにより、仲良し四人組で集まることになった。

僕らが集まるのはいつも決まって食堂の隅のテーブルだ。席につくなり、僕は「家族って何だと思う？」と尋ねた。「どうしたの？いきなり…」サヤカが不思議そうに僕の顔を覗き込んだ。僕は叔父が



亡くなったこと、叔父にはゲイの恋人がいたこと、同性愛に対する母の発言など全て打ち明けた。3人とも真剣な顔つきで聞いてくれた。「いくらお母さんでも間違っていることは違っていて言わなきゃダメだよ」とサヤカが言った。「そうだよ」と後の2人もそれに続く。彼らの言葉を聞いて、僕の中で何かが弾けた気がした。

差別的発言に心を痛めても人間関係の中で指摘できず黙認してしまう場面がある。それは間違いだと勇気を出して指摘できない。家族であれば尚更だろう。差別は多くの人にとって無関係のものと受け止められがちである。しかし当事者にとって、それは日常的に身に降りかかる現実である。こうした差別を助長する【無意識の壁】の存在に目を向けさせ行動を見つめ直す契機を自ら作り出す可能性を物語創作は有している。

6-2 同感ではなくて、同情でもなく、共感する力。

他人の靴を履いてみたら、何を感じ考えるのだろうか。共感力育成の手段として物語創作を提案したい。プレイディみかこは、『ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー』（新潮社）で「エンパシー（共感）とは何かを、【他人の靴を履いてみる（相手の立場になってみること）】と紹介している。シンパシーは「かわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見を持っている人々に対して人間が抱く感情」、つまり「感情的状態」に対して、エンパシーは「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって誰かの感情や経験を分かち合う能力」、つまり「知的作業であり、それができる能力」。「アビリティ（能力）」である。

この共感する力、他者を理解する感受性・想像力が公民的資質の育成に欠かせない。私は公民的資質を「自己と向き合い、他者とつながる中でより良い未来にしたい

と願う市民性」と定義している。他者の立場だったらどうだろうと、他者の痛みや苦しみに耳を傾けながら、【自分に問うこと】を当事者性に迫ることだと考えている。当事者性に迫る実践については「知的障害者のきょうだい」で詳述している¹⁴⁾。

渡部は「当事者性を、問題についての直接的な利害関係者と同じ心情や意識に自分たちが立つことだと考えるなら、そのようなことの要求は、ほとんどの人にとって無理難題でしかない」と述べている¹⁵⁾。ここでの【同じ】心情という表現に違和感を覚える。【同じ】心情に至ることはできなくても、「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像する過程」によって他者を理解する感受性、共感する力は育成することができるのではないだろうか。

人間は人間を離れて人間とはならない。語り合い、触れ合う中で人間となる。他者の苦痛を完全に理解することはできない。しかし他者の心情を想像することはできる。物語創作はあくまでフィクションであり、当事者の心情が本当にそうなのか、疑問はあるだろう。最後に、「言えない現実」をみつめ当事者の心情をとことん想像した作品を紹介したい。

トモヤの叔父さんが倒れたらしい。朝、携帯を開くと、「今日、学校を休むわ」という連絡が入っていた。あー僕はリョウ。世の中で言うホモだ。もちろんこのことは誰にも話をしていない。一生、誰にも話さないでいようと思っている。僕には舞台があって、その上で自分を表現できれば苦しくはない。舞台上で誰かを演じて普段は静かにしていれば、僕は幸せだ。そんな僕の親友…僕の好きな人であるのがトモヤだ。もちろん彼にも僕の想いを告げるつもりはないし「信頼の置ける男友達」でいたい。まあ彼がサヤカの事を好きっていうのも知っているし、全力で応援するよ、あっ、そんなつまらない話をしてる間に、トモヤから連絡だ。「なあ。ちょっと相談していいか?」「もちろん」「叔父さんがもう植物状態になって、延命治療をしないと死んでしまうんだ。ただ治療をしたからといって意識が戻るわけでもない。血縁関係にあるのは俺だけだから、延命するか否かを決める権利が俺にあるって医者が言うんだ。でも、でも…俺にそんな決定はできないし、叔父さんは20年も一緒に暮らしている男のパートナーがいるんだ。絶対、彼、アキラが決定すべきだし、俺には人の命なんて決められない。いやこんなの他人から言ってもな。ごめん…一度頭冷やすわ」

電話が切れた。叔父さんが大変らしい。しかし俺の頭にはトモヤの叔父さんがホモだったという事実が大きすぎてあまり話に入れない。そのことを知ってトモヤは嫌がるだろうか。やっぱり拒絶されるのかな。次の日、トモヤから再び連絡が来た。彼は決断したようだ。「これから意識の戻る見込みのない治療はしないことにした。喪主は俺がやる。アキラには【友人】として参列してもらおう」声が疲れていて、すぐに話は終わった。…無事にお葬式も終了したらしく、僕は久々にトモヤに会った。彼の表情は暗い…だけど、ごめん。僕は彼が好きだからそんな表情も魅力的!なんて思っている場合じゃない。

「トモヤどうしたの?」「あ、ごめん。リョウ。俺人間不信になりそう」「えっ!?何かあったの?」「うんちょっとね…」そこからトモヤは今発生している問題について話してくれた。一つ目はアキラさんが本当は延命治療をして欲しかったと言いつつ、周囲に何を言われたのかわからないが、「その時は混乱していて、いいですよ」と言うしかなかった、とか。二つ目は遺産相続問題だ。同居していたトモヤの叔父さん名義のマンションも含まれる。トモヤの母親は血のつながりがないのだからトモヤが相続すべきだと思っているらしい。僕は何も言えない。力になれない。ただ聞いているだけ。「話を聞いてくれてありがとう。すっきりしたよ。俺は叔父さんからアキラを大切にしていたことを知っているから、彼にとって良い方向に行くように頑張るよ」

後半で延命治療の同意と、遺産相続問題の要点に言及しつつ、リョウの語りを通して性的マイノリティの言えない現実をとことん描いている。この生徒はどうして「ホモ」という言葉を用いたのだろうか。「一生誰にも言わない」と表現したのはなぜか。その上で叔父のカミングアウトとそれを受け入れた親友のトモヤの反応を知り、自己否定に固まっていたリョウに、どんな変化があるかを想像させている。

他者の立場を想像する作業である物語創作だからこそ、迫り提示できる当事者性もあるのではないだろうか。

7. 今後の課題

7-1 【教室の公共】から【社会の公共】へ

社会参画学習として【教室の公共】を【社会の公共】に広げる実践を目指したい。選挙権の行使のみが主権者教育ではない。子どもの権利条約に認められた意見表明

権の場を設定したかった¹⁶⁾。18歳になる前の主権者として、学習者が課題を探究し、課題解決のために政治家や政策立案のキーパーソン、当事者の意見を聴き、自分たちにできること、できないことを選択判断する機会を持ちたかった。小貫実践では、法務省の法律専門家に生徒たちが政策提案書を示し、コメントを貰っている。政策立案の現場にいる人の具体的かつ詳細なコメントが生徒の意欲を高め、知識の定着につながったであろう。本実践でも生徒たちが創作した物語を外部に発表する機会を持ちたかった。ただ発表先は誰が適切だったのだろうか。民法を管轄する法務省であろうか。同性婚訴訟の弁護団であろうか。どちらを選ぶかで生徒に学ばせたい力は変わるだろう。

いずれにせよ、【教室の公共】で止まらず、【社会の公共】に広げ、社会参画の実感を持たせる実践を目指していきたい。なお、本実践で紹介した生徒の物語やイラストをもとにした教材が資料集『フォーラム現代社会 2021』（東京法令出版）に掲載される予定である。これも特殊な社会参画の一つだと考えている。

7-2 女性どうしの同性カップルの視点の欠如

生徒の中には介護をめぐる問題を描いた生徒もいた。例えば同性パートナーの介護のために介護休業を会社は認めるのか?などである。LGBTQと一括りにしてしまったが、性的マイノリティが直面している課題は様々にある。それぞれの課題を丁寧に取り上げていく必要を感じている。

加えて物語の設定がゲイカップルだったことで、レズビアンカップルの視点が欠如していた。例えば女性カップルの場合、二人で子どもを育てているケースもある。婚姻関係にないため、一緒に子育てしていてもパートナーの子供との関係は「法律上は他人」にすぎない。そのために医療現場や教育現場で直面する法的問題がある。こうした点を考えさせることで、家族とは何かをより一層考えさせる実践になるのではないだろうか。

例えば、次のような設定では、どんな法的課題を生徒は提示してくるだろうか。

大学で演劇部に所属するトモヤ。彼は早くに父親を亡くし、母親と同居している。父親には妹のアケミがいた。アケミは50歳で独身。トモヤはあるとき叔母のアケミに食事に誘われ、そこで、アケミには同性のパートナー・ミカコ(48歳)がいること。2人は10年一緒に暮らしていること。同居しているマンションはアケミ名義であること。アケミには

11歳になる娘のヒマリがおり、3人で家族のように生活していること、を聞かされる。叔母アケミはトモヤに「自分になにかあったときのために、一度パートナーのミカコと娘のヒマリに会ってほしい」と告げる。ところが、4人が会う予定だった日の3日前、アケミのパートナー・ミカコから連絡があり、アケミが急病で倒れ、入院したことが告げられる……

この実践は2020年11月に行った。改めて報告したい。

7-3 多様な生徒の価値観と伴走する真正の学び

感想に次のように書いた生徒がいた。「みんなで考える授業は良かった。私は同性婚には賛成でも反対でもない。微妙なところだ。先生は賛成として授業をどんどん進めている気がして、少しどうかと思った」。また別の生徒は「しょうがないのかもしれないけど、なんか押し付けられている感じが否めなかった。でも、【あたりまえ】に定着するにはその違和感は避けて通れないものなのかなとも思う」と書いていた。

どこかに「正しさ」があるように感じさせる授業だったことを率直に反省する。生徒たちが揺れ動いている微妙なところ、しょうがないかもしれないと感じる生徒に伴走して考えるべきだった。二人の感想から滲み出ている微妙な違和感に丁寧に耳を傾けてこそ、真正の学びになったのではないかと思う。

この点について、リフレクションによる自己内対話のプロセスを作ることが、学びを深化させるだろう。授業実践の最後に、それぞれ自分が創作した物語を読み返し、自分の価値観がどのように変わったのかを振り返る。これが生徒の学びを深化させると共に、「指導と評価の一体化」という点で授業実践の改善につながると考えている。

8. むすび

「1人の同性愛者が10人にカミングアウトしたら、問題はほぼ解決する」。これはゲイのアーティスト古橋悌二氏(ダムタイプ)の言葉である。主張しないことをよしとする日本社会では、語られずにいる課題は多い。本音で語り合うこと。カミングアウトしても大丈夫だと感じられる環境を作ること。そして身近な人に自分の生き方を語っていく勇気が必要であろう。

当事者のカミングアウトと関係性の構築が広がることで、これまで想定しなかった世界を感じる人々が増え、【他者のことを想像する力をもった社会】になるのではないかと思っている。本実践を叩き台に、性的多様性を

寛容する社会科教育の実践が広がり、性的マイノリティの当事者が自己肯定感を持てる学校環境が広がることを願っている。

参考文献・引用など

- 1) 東京学芸大学附属高校紀要第57号「教科横断的な視点からの教育活動の改善-第18回公開研究大会を受けて-」で詳述。
- 2) 渡辺大輔ら編著『セクシュアル・マイノリティをめぐる学校教育と支援増補版』(開成出版) P.76
- 3) 日本経済新聞「21年度からの中学教科書「性の多様性」理解促進に工夫」2020年3月25日付
- 4) 朝日新聞「多様な性、教科書掲載広がる「LGBT」世界史などに」2017年4月21日付
- 5) 差別や偏見を隠した「ずるい言葉」を解説。社会学者・森山至貴さんインタビュー「好書・好物2020/10/07」
- 6), 9) 社会科教育研究137号「論証の構造を活用した学習の授業構成-同性婚を事例として-」(小貫篤2019) P.102, 108
- 7) 『ここから始める政治理論』(有斐閣ストゥディア) 第11章
- 8) 社会科教育研究137号「米国の社会科教育研究の動向」(福井駿2019) P.96
- 10) 『同性婚だれもが自由に結婚する権利』(明石書店) P.40
- 11), 14) 第59回読売教育賞最優秀賞受賞「社会問題と葛藤する-知的障害者のきょうだい-」。「先生のための教育事典 EDUPEDIA」edupedia.jp でお読み頂けます。
- 12) 「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドラインの解説編などによる」
- 13) 『はじめて学ぶLGBT』(石田仁著) P.30 釜野さおり(2016)「友人からのカミングアウト」『性的マイノリティについての意識2015年全国調査報告書』:135-147
- 15) 『主権者教育論』(渡部竜也著/春風社)「コラム7当事者性についての私見」P.339
- 16) 「シティズンシップ・社会科関連教育において、政治に関して、何のために、なにを、どのように教えているのか-上尾市立東中学校授業実践に関する報告-」(藤原孝章, 森茂茂雄, 松倉紗野香) <2019.09.21>